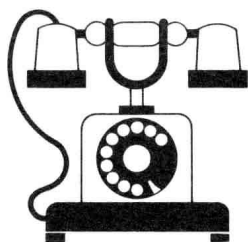


批評の方法⑦

マルクス主義的方法



棚沢厚生
棚沢雅子 訳

大修館書店

批評の方法 7

マルクス主義的方法 ©

A. Kurumisawa 1974
M. Kurumisawa

1974年6月10日 初版発行

訳者との協定により
換印を廃止する。

訳者 棚澤 厚生
棚澤 雅子
発行者 鈴木 敏夫

株式
会社

大修館書店

(101) 東京都千代田区神田錦町3-24

電話 東京 (294) 2221 (大代表)

振替 東京 40504

印刷／壮光舎 製本／大成社

「マルクス主義的 方法」について

本巻の原題は「クリストファー・コードウェルとマルクス主義的批評」(Christopher Caudwell and Marxist Criticism)で原著の第七章に当るが、改訂紙装版(一九五五)では「エドモンド・ウィルソン」の章とともに割愛された。スペイン市民戦争に参加、若くして逝ったイギリスの俊英コードウェル(Christopher Caudwell, 1907-1937. 本名 Christopher St. John Sprigg)の劇的にもいえる生涯については、本文第一章にくわしい。本書はこのコードウェルを中心に、マルクス主義的批評、ないしはより広く社会学的な文学批評を概観したものである。コードウェルの批評関係の著作のうち本巻で扱われ

ているのは『幻影と現実——詩の源泉の研究』(Illusion
 and Reality; A Study of the Sources of Poetry, 1937)*
 『滅びゆく文化の研究』(Studies in a Dying Culture,
 1938)* 『物理学の危機』(Crisis in Physics, 1939) の
 三篇であるが、その後に『続・滅びゆく文化の研究』
 (Further Studies in a Dying Culture, 1949)* 『ロ
 ンズとリアリズム——イギリス・ブルジョワ文学の研究』
 (Romance and Realism: A Study in English Bour
 geois Literature, 1971) の刊行をみたほか、『滅びゆく
 文化の研究』、『物理学の危機』、『続・滅びゆく文化の研
 究』からの抜萃が『自由の概念』(The Concept of Free
 dom, 1965) というタイトルで出た。なお『詩集』
 (Poems, 1938) も一九六五年に再刊されている。

柳 澤 厚 生
 柳 澤 雅 子

目次

「マルクス主義的方法」について……………	iv
一 クリストファー・コードウェル——人と作品……………	3
二 詩と社会——コードウェルの方法とその背景……………	17
三 社会学的批評——十九世紀まで……………	31
四 マルクス主義批評とその周辺——米英ソ……………	56
五 マルクス主義批評の欠陥と限界……………	85
——コードウェルふたたび……………	
原 注……………	105
訳者あとがき……………	107
索引……………	114

マルクス主義的方法

一 クリストファー・コードウェル——人と作品

『共産党宣言』後一世紀のあいだに、マルクス主義批評における唯一の大規模な、とは言わないまでも、第一級の作品が、若冠二十八歳のイギリスの青年によって書かれたというのは、少なからず皮肉なことである。この青年は、その前年にマルクス主義者となり、翌年他界している。書物の名は『幻影と現実——詩の源泉の研究』(*Illusion and Reality: A Study of the Sources of Poetry*)。著者クリストファー・セント・ジョン・スプリッグ、この真面目な著作には「クリストファー・コードウェル」の名を使っていた。コードウェルはスペインで、共和制擁護の国際義勇軍イギリス大隊とともに戦い、戦死した。戦闘第一日目、退却援護のために機関銃射手としてハラマ上方の丘を守っているうち、ムーア兵に殺されたのである。遺骸はついに発見されなかった。

クリストファー・コードウェルの生涯は、ちょっとした早熟の奇跡といえるものであった。裕福な中産階級の子弟として一九〇七年ロンドンに生まれ、ヨークシャーで育った。十五歳に

ならぬうちに、ローマ・カトリック系の私立学校セント・ベネッツ・イーリングを離れ、ジャーナリストとなる。『英領マラヤ』(British Malaya)誌を編集し、航空関係書出版社を設立、同社技術誌の一つを編集し、さらに自動車用無限変速ギアを考案したが、これが多大の関心を呼び、結局その発明者は十七歳の少年であることが判明したのであった。

十八歳のときに書いた飛行船にかんする本は、その方面での標準的なテキストとなった。彼はまた、飛行機の操縦もおぼえた。二十一歳で推理小説、航空関係の通俗書、新聞の連載物などを書きはじめ、フリーの文筆家として立つ一方では、詩を書き、自然科学の勉強をしていた。

一九三四年二十七歳のとき、コードウエルはマルクシズムに関心を持ちはじめ、次の夏はコンウォールで、マルクス、エンゲルス、レーニンを読んで過ごした。秋にロンドンにもどると、ポプラーの港湾労働者居住地区に移り、共産党に入党した。ポプラーでの一年間のあいだに、『幻影と現実』のほか、死後出版された二篇の真面目な書物を書き、またおそらくは、推理小説を書いてこれを生活の糧としていたらしい。さらに、精力的に党の活動をおこなっていた。自分の階級にまつわる罪悪感が、おそらくはコードウエルをして、労働者の居住地へ移住せし

めたのであろうが、この同じ罪の意識から彼は、党のインテリをもっぱら避けると同時に、黨員の仕事のなかでも最下級の仕事（たとえば、ちらしの作成や配布、スローガンの書き出し、文書販売、ビラ貼りなど）だけをやることを強く主張した。マルクス会館で開かれるマルクシズムと文学の学習会に短期間出席したが、じきにやめて、地下鉄駅でまた『デイリー・ワーカー』を売りはじめた。彼は党機関紙には執筆しなかった。また、入党してからは詩を書くのをやめてしまった。一九三六年十二月、スペインに派遣してくれるよう党を説得したが聞き入れられず、^①傷病兵運搬車を運転してフランス経由でスペインにはいるため、もどってくることを約束したうえで、イギリスを発った。だが帰国はせず、これも、例の階級的罪悪感と知的活動にたいする軽蔑の念がそうさせたものであるが、共和国軍に身を投じ、国際義勇軍に移されると、一級の機関銃操作をおぼえて、数ヶ月後には他の兵士たちに教えるほどであった。訓練が終って一九三七年二月、コードウエルは戦場に出てじきに戦死した。

『幻影と現実』（のちに論じる）を別にすると、コードウエルが真面目な著述用にとつておいたペンネームで生前に出版した本は、ただ一冊だけであった。（売文用に本名を、堅い仕事にペンネームを用いるというこのあべこべのやり方は、例の罪悪感、詩の放棄等々、興味ある

事実へとつながってゆく。小説『このわが手』(This My Hand)はきわめて精神分析的な作品といわれるが、アメリカには現物がほとんどなく(国会図書館にはない)、今もって捜し出せずにいる。ジョン・ストレイチーは、コードウエルの死後出版されたある書物の序文で、この作品を読んだが失敗作だ、と述べている(ストレイチーがしばしば審美眼を欠いていることを言えば、この意見をそう重視する必要はないが)。スプリッグの名でコードウエルは、七篇の推理小説を発表した(表題は後世の人びとには興味ぶかいかもしれぬ)。すなわち、『ある飛行家の死』(The Death of an Airman)、『完璧なアリバイ』(The Perfect Alibi)、『陽焼けた顔の屍体』(The Corpse with the Sunburned Face)、『六つの奇妙なもの』(Six Queer Things)、『ケンジントンの犯罪』(Crime in Kensington)、『女王の死』(Death of a Queen)、『フリート街の災禍』(Fatality in Fleet Street)がそれである。これらの作品はイギリスよりもアメリカで成功をおさめ、うち四篇は、ダブルディ・ドーラン犯罪クラブの奥付で重みを加えた。同じくスプリッグの名で、航空術にかんする本を五冊出している。『飛行船——その設計・歴史・操作・将来性』(The Airship: Its Design, History, Operation and Future)、『こゝしに飛ぼう』(Fly with Me) (共著)、『イギリスの航空路』(British Airways)、『大飛行』(Great

Flights)。残り一冊は本の名がわからなかった。

一九三六年に書いた二つの堅い著作が、死後コードウエルの名で出版された。一つは『滅びゆく文化の研究』(*Studies in a Dying Culture*)で、ストレイチーの序文を付して一九三八年に刊行された。これは一連の八つのエッセイをおさめており、ショー、T・E・ロレンス、D・H・ロレンス、ウエルズの四人の著述家を研究し、平和主義、愛、フロイトと精神分析、自由という四つの概念にかんする問題を考察したものである。これら八篇の論考を結びつけているテーマは、ブルジョア文化の危機は、「人は生まれながらにして自由であるのに、いたるところで鎖につながれている」というルソー的誤謬(異端の説と言ったほうが正確であろう)の遺物によって惹きおこされる、という考え方である。コードウエルは言う。「この幻想は、人間は生まれながらに自由であるということ——すなわち、社会のあらゆる機構は人間の自由な本能を制限し、それを活動させずにいろいろな拘束を与え、人間はできる限りその拘束に耐え、これを最少限にとどめなければならないものとされる、という意味において生まれながらなのである。したがって、人間は、みずから望むところを自由に成し遂げているときこそ最善にして最も高貴な状態にある、ということになる。」この基本的な幻想という角度からコ

ードウエルは分析する。T・E・ロレンスの指導者としての失敗を（成功した指導者レーニンにたいする者として）。シヨ、ウエルズ、D・H・ロレンスの不十分な芸術と思想を。精神分析、平和主義、そして愛と自由のブルジョア的概念がもつ弱点を。これにコードウエルは、社会からのではなくむしろ社会における自由、束縛のなかに生まれながら自由を獲得しようとしている人間、というマルクス主義的な自由観の厳しさを対立させる。これは、必然性への無知としてとらえるルソー的自由にたいし、本質的にはエンゲルスの言う「自由とは必然性の認識」であって、エンゲルスの血は、コードウエルの全作品についてもそうであるが、この書物のなかを赤い糸のように流れているのである。

『滅びゆく文化の研究』にはかなり多くの欠陥があるが、そのうちのあるものはマルクス主義的批評の伝統から来ているものであり、あるものはコードウエル自身によるものである。たとえば、次にあげるような論理の飛躍による誤った結論にみられるとおり、政治的推論のあるものは子どもじみている。「コミユニズムが不可避であることを理解しはじめたときにはじめて、ブルジョアジーは、ロシアを他のいかなるブルジョア国家にもまして危険な存在とみなしはじめたのだ。だがこうした自覚は、資本家階級をファシズムへ赴かせるものにはかならず、そ

れゆえにファシズム的国家が、今日、ロシアにとって大きな脅威となっているのである。」政治的予言のあるものは、マルクス主義が社会的予言と支配の基礎をなす、とする主張を支える役にほとんど立っていない。たとえば、次のように否定しているところは、のちにやってくるナチスの現実に適合していないのが皮肉である。「したがってイギリスは、ドイツが勝ったらすべてのイギリス婦人を凌辱し、男子の首を刎ね、エルギンの大理石彫刻を運び去ったであろうなどとおそろしがる必要はないのだ。」批判のあるものは素朴な階級告発であり、同時代の思想家にたいし、「だが彼もまたブルジョアである」と絶えず驚きの念をくりかえす。それはあたかも告発か罷免のようであり、ブルジョア芸術は、それが定義上ブルジョアであるがゆえに悪だといふかのである。しかしながら、おしなべて洞察の水準はきわめて高く、皮肉は辛辣で、いくつかの特殊研究は、思想の社会的規定にたいする第一級の分析になっており（とくに本書の後半、コードウェルは人身攻撃をやらずに種々の運動を論じている）、わけても、唯物論のみならず神経病学的見地からなされた精神分析学批判は、その洞察の鋭さを示してめざましい。

コードウェルのもう一つの理論的な著述『物理学の危機』(*The Crisis in Physics*)は一九三

九年、ハイマン・レヴィ教授編集により、同教授の序文を付して出版された。同書は未完のままであつたが、コードウエルが自分の頭のなかでこの問題を処理するために書いたものであつて、おそらく公刊の意図はなかつたと思われる。相対性物理学や量子物理学の先にある物理学的思想の新しい趨勢、なかならず、若手学者による因果性への挑戦を論じている。コードウエルは、「実証主義」や「経験論」がこういうふうにあらわれていることを攻撃し、それは、理論で実験の代用をさせて科学を放棄することにつながるものだと非難する。そして、その物理学的世界がブルジョア的社会像を映し出しているというわけで、結局はブルジョアの観念論として退けてしまう。この点でコードウエルは、レーニンが『唯物論と経験批判論』(Materialism and Empirio-Criticism)のなかで、相対性物理学にたいしておこなつたのと同じような攻撃をくりかえしているように思われる。あの場合、結局はレーニンの誤りが判明したが、あるいはコードウエルもまた誤りを犯しているのかもしれない。私には判断する資格がないが、実際、この書物の後半は、理解するのがやつとのことなのである。驚くばかりに専門的知識を駆使した本であるらしく、ロンドンの大英工科大学の数学教授であるレヴィは、序文のなかで本書を絶賛して、「経験ゆたかな科学者にもめつたにみられない、社会的・科学的両方の理解力が結

合したものがコードウエルにそなわっていると、「そういうものをこの青年のうちに見いだすのは驚異に近い」と言っている。非マルクス主義的物理学者たちに本書がどういう印象を与えるのか筆者にはわからない。

死後出版された三番目の著書は『詩集』(*Poems*)で、これは、無記名の伝記的序文を付して一九三九年に公刊された。ここには、コードウエルが原稿のまま残した詩のうち、ほんのわずかだけを選んだものようであるが、それらの詩から推して、生前コードウエルが一篇の詩しか公けにさせなかった理由が容易に理解できる。詩は諷刺的で、観念的で、精神分析がいちじろしく盛込んであって、スタイルには明らかにソースがある（とりわけ形而上詩人から出ている）。そして、しばしば抒情的で、また常に非常に才能あふれたものではあるが、まだできあがっていない詩人の作品であることは明らかである。しかしながら、やはりカトリック改宗のさいに詩作を放棄したホプキンズのように、かりにコードウエルが詩作放棄の決意を最終的にはひるがえして、新しい視点からふたたび詩にもどったならば、本格的な詩人となったであろうことはまず疑いない。

コードウエルが非常にたくさん書いたらしい「カフカばりの」短篇小説は、ついに出版され